

阿川弘之『魔の遺産』の方法

—写真・引用・聞き書き—

楠田 剛士

1

「もう体験者でない作家が書く段階がきてる」

被爆六十一年後の現在ではない。昭和二十八年の話である。広島で開かれた座談会（『中国新聞』昭28・10・23）で、大田洋子は原爆を書くことについてそのように発言した。

原爆についてはまだ扱いかたが足りないですね、主流にそういうものが出ていらないので文壇で孤立する傾向があります、もう体験者でない作家が書く段階がきてると思うのです、すけどね、体験者だけなら、原民喜が死に、峠三吉が死に、大田洋子が死んだら、あと書かないのか、そうでなくて阿川弘之でもだれでもいくらでもいる、というようにこのあとの人に期待しなければならぬ、もつとも広島に四、五日やってきて、それだけで手品のように書きあげる人がありますね、わたしにはとてもあんな手品はふしぎで仕方がない、そうかといって文学ということにあまりこだわらなくてもいいと思うけど、現実があまり強烈でこしらえらる

非常に弱くなる、普通の材料でないんだから、記録文学としても新しい方向があると思いますよ、センチメンタルすぎるなどいわれる作品もあるけれどセンチになるのは当たり前なので広島人の感じ方も人により、また時期により、いくつか段階があるんでしょう。どうもジャーナリズムが原爆の問題へ乗りきらない、なるだけ避けようとする傾向がある、第一、日本政府が原爆のゲの字もいわないじゃありませんか（『文学ひとすじ』太田洋子女史を囲んで 2）

大田は原爆問題に正面から向き合わない文壇、ジャーナリズム、日本政府を批判する。一方で「広島に四、五日やってきて、それだけで手品のように書きあげる」作家に対して、その取材・創作姿勢に疑問と不満を抱く。小説やエッセイを書き続けてきた大田自身も、書くことの困難さを感じている。しかしそれらの発言は示唆的である。原爆を「文学」として書くことの困難さ。書こうとする者が迫られる「原爆」と「文学」そのものの再考。それを通じての（新しい記録文学）の可能性。作品受容の複数性、可変性。被爆八年后に提出された問題は、現在の原爆の語りの問題として我々に投げかけられている。

この時期、大田は「日市歴訪」という副題を持つ短編群と、『夕風の街と人と——一九五三年の実態』（以下『夕風の街と人と』）を発表する。『夕風の街と人と』では、大田自身をモデルとするような作家・小田篤子が、街を歩き廻り、人々の声に耳を傾け、被爆八年後の「日市」（広島）の実態を描き出そうと試みる。「見たものを地図のごとく書く」（『文学ひとすじ』 3）『中国新聞』昭

28・10・24」という方法意識を見出すこともできよう。

「体験者でない作家」として大田に書くことを期待された阿川弘之は、『夕風の街と人と』に先行して昭和二十八年七月から『魔の遺産』を発表している。阿川も大田同様、被爆八年後の広島を舞台に、作者をモデルとするような作家・野口三吉が街を取材して廻り、昭和二十年八月から昭和二十八年の現在に続く原爆問題をとらえようとする物語を描いた。同時期に、同じような構成を持つ小説が登場しているのは単なる偶然なのだろうか。

阿川は執筆当手を振り返り、「七年も八年も経つて」「尚、色んな悲惨なことが起つてゐる」「広島の実情」を描きたかったと述べている（『作品後記』『阿川弘之自選作品』II、新潮社、昭52・10三六七頁）。関心は特に「原爆後遺症」と「市民の診察をし調査をしデータを集めるけれども、治療はしない」ABC（原子爆弾傷害調査委員会）に向けられていた。疑問と不満はあるものの、ABCにも、「アメリカ人一般」にも、「広島島の被災者」の間にも様々な意見があり、「自分の作品をイデオロギーが先に立つた政治的・反米小説にはしたくなかつた」ので、「出来栄えはともかくとして、作中人物の口を通じ、出来るだけ多角的観方を出してみようと試みた」という。この言葉を信じれば、『魔の遺産』は原爆を語る人々の多声的な世界が構想されていたことになる。

だが、小説における声の収集と編集という発想を可能にするような文学的な土壌が、同時期に生成されていたことにも注目しておきたい。この頃、文学の流行にルポルタージュがあり、大田の小説取材と執筆はその動きに連動していることは別に述べた

ことがある。流行のルポルタージュの方法を小説に採用し、原爆を題材にした小説を商業ベースに乗せようとするのは、それがより広範に読まれ、より多くの人々の理解と共感を得ていくための戦略にほかならない。しかし重要なのは、ルポルタージュという問題構制により、原爆の実態とは何か、文学としてどのように書くか、そもそも書くことができるのか、といった問題を書き手自身が考えざるを得なくなったということである。先に見た、原爆を書くことの問題や（新しい記録文学）への指向も以上の文脈で理解されるだろう。阿川は次のように書く。

原爆を扱つた文学としては、先に原民喜氏や大田洋子女史の作品がある。この二人は、広島の悲惨を身を以て体験してゐる。私は外地に出征中で直接の被災者ではない。そのため、公平に多角的にといふことが、とかく散漫に傍観者的になり勝ちだつたかと思ふ。大田洋子女史など、広島復興計画で市を東西に貫く百メートル道路の建設が始つた時、「あれは軍用道路だ」と言つて非常に神経質な反応を示されたが、私はそんなことにはならなかつた代り、被爆者の苦しみを自分のものとして追体験するには困難を感じた。（前掲「作品後記」）。

実体験に基づいた原や大田の文学が先行して存在し、大田も書き続けている中で、実体験がない後発の自分が原爆を題材として小説を書くにはどうしたらよいのか。取材という実体験を小説で再構成するルポルタージュの方法が選ばれたのは必然性を伴っていた。阿川は「作品後記」の中で「執筆にあたって色

んな人の話を聞いた」という¹⁾。しかし「それでは足りず、広島通信病院院長蜂谷道彦博士の著書『原爆雑話』、及び子息を白血病で亡くされた林芳郎氏の著書『一郎』から、許しを得て場面を借用した」と書いている。前者は後に『ヒロシマ日記』にまとめられる記録で、第三章の座談会で引用される。後者は被爆した子供の病気の経過を著したもので、小説全体に渡る子供の入院治療はそれに対応して描かれる。さらに病死後の「解剖の場面は、東大医学部の人に頼んで死体解剖を見学させてもらひ、参考にした」という。以上のように『魔の遺産』は、単なる現地レポートではないし、まったくの虚構というわけでもない。阿川は先行する原爆の文献を読み、それを引用することで自らのテクストを構築しているのである。こうした小説化の方法は、例えば井伏鱒二の『黒い雨』（新潮社、昭41・10）に先行するものとして注目してよいだろう²⁾。さらに阿川のテクストには、他の原爆文学・記録・写真を読んだ記憶が様々に書き込まれている。取材に基づいた記録ではなく、小説という虚構を通して提出される「原爆」の問題とは何か。本稿ではルポルタージュという方法と、先行テクストを読む経験から描かれる「声」に注目して、阿川の方法が持つ可能性と問題点を考察する。

2

『魔の遺産』（引用後の括弧内は章・節）は、昭和二十八年三月下旬から、五月一日までの約一ヶ月間に渡る作家・野口三吉の

広島滞在を描く。本文は四章構成で、二つの大きな物語ラインが流れている。ひとつは野口が広島街を廻り、原爆医療に携わる人々や被爆者に会い、取材していくもので、医療関係者への取材（第一、二、四章）、「原爆名所めぐり」（第二章、被爆者との座談会（第三章）などがある。もうひとつは野口の従弟・健の病気に関わるものである。徐々に病状が悪化し、最後には亡くなり、死後解剖されるまでの健が全編に渡って描かれる。物語はこの二つのラインが折り重なって展開していく。

野口の取材場所となるのは広島市内とその近郊だが、冒頭は、叔母の常子と登った山の上から市街を眺望する場面である。この時点で既に広島に到着してから「五日目」だが、滞在先の叔父夫婦の子供である健の入院があったので、「未だ何も観てゐない状態だった（一・一）。野口は「新しい広島を、何所か高い所から眺めてみようといふ」（一・二）考えから、常子と共に山に登っている。なぜ物語は山の場面から始まるのだろうか。

まず場所を確認しておく（昭和27年の広島と現在の広島）塔文社、平16・3）。この「小高い山」は「太田川の三角洲の上に末ひろがりに拡がった市街の、扇のかなめの位置にあたり、「前が拓けると、街の大部分を鳥瞰する事が出来る場所とある。近くに「水源池」が、「真下」に「小学校」があり、「山裾の一带は、もと工兵隊の作業演習場で、石の記念碑が五つの面から軍人勅諭の五つの文句を鑿^{ウツ}り取られて、其のまま残つてゐる」ような場所といえは牛田山か。山から見えるのは、市内を緩やかに貫流する太田川をはじめ、川舟、段々島、小学校、広島駅に入っ

ていく貨物列車等である。これらは「赤松の疎林」「羊齒しだ」「小笹」「古い落葉」「白い花の房をつけた、小さな馬酔木しび」「ひよろひよろした小麦」「菜の花」「芽を吹いた柳や桃や花蘇芳はなすはうの花」

「桜」といった自然景物が細かく書き込まれることで、「美しく望まれる景色」を強く印象付けている。さらに、健が入院中の「同仁病院」、「都市計画で新しく拡張された広い道路」、比治山の「ABCの建物の群」も見える。いずれも野口がこれから訪ねる場所である。ABCは最初の取材地であるが、ここからの眺めについて、「比治山の真下から、未完成の幅員百メートルの大道路が、真つすぐ市内を横切つて西へ伸びてゐるのが、空地のやうに白つぽく見えてゐた。其の途中に、野口は未だ見学してゐないが、或る高名な美術家が設計した平和大橋、西平和大橋といふ二つの新しい橋が掛かつてゐる筈であつた」(一・四)とあり、やはりこれから訪れる場所が示されている。山からの眺めは、今後の展開をダイジェストに予告しているのである。

また、遠望される市街地は次のような光景として描かれている。曾て、被爆直後の写真で見た、見渡すかぎりの沙漠の町は、今、其処から望む限り、春の陽光を浴びた家、家、家の屋根で、みつしりと埋め尽くされてゐた。市街の中心部に樹木の緑色が殆ど見当らない事に気づきさへしななければ、八年前、此の町が異様な滅び方をした事、白くふくれた、京の這ひ兎人形のやうな水死体が、川筋に無数に浮いて、潮につれて上げたり下げたりしてゐた事、皮膚の焼けて垂れ下つた化け物のやうな怪我人や、腐肉のやうな焼死体が、

其の小学校の庭、其の道路を埋めてゐた等といふ事が、もしかすると、奇怪な幻想か白昼夢だつたのではないかと想はれる程、それは明るく穏やかな眺望である。(一・一)

この眺めを前にして、野口は自分の仕事のことを考える。

此の夏までに、「原爆八年後の広島」といふ文学的な報告を書くのが、彼の約束してゐる仕事であつた。雑誌が其の仕事で野口に指名して来たのは、彼が十五年前の此処の高等学校の卒業生である事が、一つの理由であつた。それから、野口には広島に叔父の家が——日限を定めず気楽に滞在出来る身寄りのある事が、双方に都合だつたからでもある。野口はしかし、漠然とした不安を感じてゐた。市の北のはづれの此の山の上から眺めては、既に焼け跡の荒地も見出し難い程建てこんで見える街の姿は、彼に、突き崩された巢を、何も考へず何も言はず、せつせと建て直してやまない勤勉な蟻の営みを想はせた。今、ガイガー計数器を掲げて、広島を歩き廻つても、原子爆弾が残した放射能はすべて消えて、恐らく針はもはやピクリとも動かないにちがひないが、これから自分が、此の建て直された蟻の巢の中を訪ね歩いて、頭の中の計数器に、果たしてどんな反応を導き出す事が出来るか——。(一・一)

山から街を俯瞰する野口の内面には、それまでの、そして現在の広島との距離感が端的に現われている。野口は広島出身だが、長らく帰郷したことはない。「十年ぶり」であるから、実際に自分の眼で見た広島は被爆前のものである。「原爆」に

ついで「色々読んであるけど、直接経験した人から聞いたら、大いに聞きたいよ」(二・十二)と述べており、常子の被爆体験も、山登りの後、健の病院へ向かう車の中で聞いている。つまり野口にとつて、広島に取材に来るまで原爆の話題は「直接体験した人」の話や近親の話よりも、新聞や雑誌等のメディアから得た情報が身近なものであったことを示している。「家、家、家、家の屋根で、みつしりと埋め尽くされてゐる」眼前の光景を、以前見た「被爆直後の写真」と比較してしまうのはそのためである。実際、被爆した街の様子を広くとらえた写真は、高台から見下ろした角度で撮影されていることが多い。復興しつつある街の全景をとらえる場合もまた、こうした視点にならざるを得ない。カメラの視点、あるいは写真の記憶を持つ野口の視点は、広島を眺める外側(山)から見るそれと一致するのである。

さらに山は野口の過去と接続する。野口は高等学校時代に「山岳部」に属していた。「よく一緒に山登りに行った」(一・六)仲間であり、「彼の二級上」だったのが、市内で産婦人科医院を営む脇本である。脇本は広島大学医学部の柳川忠助教授(第二章、広島大学医学部の玉川忠太がモデル)、被爆者グループの「柳の会」(第三章)、ABCに勤める楠原医師(第四章)といった、各章で主要な対話者となる人物・団体を紹介し、さらに原爆医療に関する知見も述べ、現地案内人・相談役という大きな役割を担う。また取材で訪れるABCは比治山にあるが、そこは「広島島の桜の名所」であり、野口にとつて「脇本達と一緒に、朴歯の下駄を穿き、一升瓶を提げて、此の公園の中を放歌乱舞して歩い

た」(二・三)懐かしい場所である。「広島の現地報告を書く」ということを脇本から聞き、野口に取材協力を申し出た井上主悦も同期生で、「恐羅漢山のスキー場と一緒に行った事があつた」(二・八)という。こうした過去があつて野口は「青年期の初めの甘い夢をよみがへらせて呉れるやうな、古い城下町の痕跡」を見ようと、取材には「いくらか感傷的な愉しい期待」(四・一)でやって来た。しかし広島市内を歩いてわかるのは「野口が知つてゐる古めかしい城下町の面影はもはや完全に失はれてしまつてゐるやうであつた」(一・六)ことである。これから行う取材が困難なものであることは、ここで「漠然とした不安」として予感されている。以上のことを考え合わせれば、「山岳部」の過去と、広島を眺める現在と、今後の取材を結びつける山という場所は、野口の取材の出発点としてまことにふさわしい。

3

野口が被爆都市を眺める視点は、まずメディアが提供する記事を読み、写真を見ることによつて形成されたことを指摘したが、小説の時間設定が昭和二十八年であることから、野口が見た「被爆直後の写真」とは、その前年に刊行されたいくつかの原爆写真集に掲載されたものだと考えられる。「原爆被害の初公開」という特集を組んだ「アサヒグラフ」(昭27・8・6)、岩波写真文庫シリーズの『広島―戦争と都市―』(岩波書店、昭27・8)、梅野彪・田島賢裕編『原爆第1号 ヒロシマの写真記録』(朝日出

版社、昭27・8）、北島宗人編『記録写真 原爆の長崎』（第一出版社、昭27・8）が相次いで刊行されている。特に「アサヒグラフ」は発売当時、「初版五〇万部がまたたく間に売り切れ、増刷を四度し、最終的に七〇万部が売れた。日本ペンクラブやユネスコ日本支部などによる「全世界へアサヒグラフを送れ」という運動がおこり、英訳を添えた同誌が海外にも送られた」（徳山喜雄『原爆と写真』御茶の水書房、平17・8 九十五頁）ように、早くも原爆写真集の代名詞としての位置を獲得していた。また「岩波写真文庫は、「原爆」に関する啓蒙的な性格もあって、多くの小中高の学校図書館などで購入され、原爆の恐ろしさを全国の子供たちに伝える役割を果たした」という（黒古一夫『原爆文学論―核時代と想像力』彩流社、平5・7 一九一頁）。原爆写真に啓蒙的・教育的な効果が期待されたことも、引用・複製に強く作用したのであろう。原爆写真集に掲載された写真は以後、繰り返し広範に引用・複製され、我々の原爆イメージの形成に関与してきた。

同時代の原爆写真の記憶は『魔の遺産』にどのように書き込まれているのか。原爆写真が広範に読まれるようになったことで、原爆を書くこと、語る場がどのように変容したのか考察してみたい。野口は「原爆名所めぐり」の中で、既に見た写真、あるいは写真のイメージと出会う。廻ったルートは、原爆記念館、原爆ドーム、住友銀行の石段、百メーター道路、平和大橋、西平和大橋、平和記念館、原爆死没者の慰霊碑の順である。野口は平和記念館の「備へつけの写真帳」で、「瓦斯会社のガスタンクの胴に、鉄梯子の影が焼きついてる写真」や、たくさんの

「熱線でただれて、眼をむいて死んでゐる、気の弱い人は眼を蔽ひさうな、むごたらしい死人の写真」や、「広島県庁の近くの、万代橋の、タール舗装の上には、其の時刻に東から西へ渡つてゐた、約十人の歩行者の位置が、焼きつけられて残つてゐる」というキャプションを見ている（二一五）。これらは「割に最近、アサヒグラフや岩波の写真文庫」で見ることがあるという。「住友銀行の石段の人影」について「話に聞いて」おり、原爆ドームが「絵や写真で有名」であること、平和大橋と西平和大橋が「広島市の委嘱で、高名な美術家が設計した」ことを知っている（二一五）。野口は広島に来る前に、そのような形で「原爆」と出会っていたのである。『魔の遺産』のような小説を読もうとする読者も、同時代の原爆関連著作のうち、話題性をもった写真集を見ていることは大いにありうる。むしろ多くの人間にとって、「原爆」はそのような出会いから始まるのではないのか。原爆写真を見るときという体験は、同時代の読者にとって一次的な体験となり、原爆を主題とするテクストを読む際の先行経験となる。

ところで、物理学者の武谷三男は『戦争と科学』理論社、昭28・1 二十四頁で、「現代戦におきまして、最も頂点を形する原子爆弾につき、最近講和後に占領下に公表されなかつた写真が、いろいろのもので発表されております。それはもうすでに御覧になつたと思いますが、「朝日グラフ」とか岩波の写真文庫の「広島」、それからまた外に最近二つばかり広島と長崎につきましての写真がでております」、「そういうのをごらんになれば何も私の話を聞かなくても一目瞭然です」と述べている。読者が原爆

写真を見ていることを前提にする語りは、「アサヒグラフ」発売後に大々的な原爆特集号を組んだ「改造」（増刊号、昭27・11）にも窺うことができる。「改造」に寄稿した論者たちが「アサヒグラフ」を読んでいることは明らかであり、写真で示される原爆の威力、都市の破壊をふまえたコメントが散見される。武谷が寄稿したルポルタージユも例に漏れない。「生き残った12万人 一九五二年の広島」はその副題の通り、「一九五二年の広島」を取材し、当事者の話や市内の各所を報告する。同号には「A・B・Cの内幕 テーラー所長との問答」という「探訪記」があり、末尾から判断してこれも武谷の筆による。以下、数箇所を引用する（番号は引用者による。以下同）。

①私は原子爆弾のことなどしらべたり聞いたりして来たが、戦後は一度も広島も長崎も訪れたことはなかった。そこでこんど広島県の成人講座で話しをするために広島に行く機会に、できるだけ多くを見たいと思つた。

②広島に着いた日に、原爆被害者の会をやつておられる書記の人や、二、三人の人に会つていろいろのことをうかがい、被害者を訪問する計画などをたてた。できるだけいろいろの階層の人々をたずねたいと思つた。

③中国新聞の案内で、広島城址に行つて見た。こゝは爆心から約一軒くらいの距離であるが、広島城は爆風であつたという間にけし飛んだのは、例えばアサヒグラフなどで見られた方もあると思う。城の石垣の下に、原爆被害者の作家原民喜の碑がある。雨の中を碑の前にたゞずんだ、小さな

低い碑だ。／本丸のあとの石垣をよじ登つて見ると、市を一望のもとにをさめることができる。このような広さを一挙に壊滅させ、この世の地獄と化してしまつた原爆のすさまじい威力を、いまさらのように感じた。

（以上「生き残った12万人」）

④話し終つて、A・B・Cの建物を出ると、広島市が一望のうちに見える。有名な百米道路、爆心地ドームその他、上から見ると美しいし、広島はずつかり建物でおおわれていて、原爆直後の焼野原の写真とは見ちがえるほどだ。／上から、原爆一発の破壊はんいを、いまさらのように感じながら、見渡し、テーラー所長との問答などについて同行の諸君と談しながら、自動車道を歩いて比治山を下つた。（M・T記）

（以上「A・B・Cの内幕」）

広島が故郷かそうでないかの違いはあるが、『魔の遺産』の野口も、武谷も共に「戦後は一度も」広島を訪れてはいない。そして共に「アサヒグラフ」を見た経験がある。その先行経験をもとに、広島で「いろいろのことをうかがい」、高い場所から広島街を俯瞰する。彼らが広島を眺めるとき、ちょうど「アサヒグラフ」や『広島』に掲載された、広島のパノラマ写真を撮つたカメラのような視線と重なるのである。またABCの取材、被爆者あるいは広島在住者の話（座談会）、遺構・施設・名所巡りがセットになつた取材構成も同一である。

『魔の遺産』はこうした同時代の原爆写真集とルポルタージユとに多分に響き合っている。そして原爆写真をめぐる次の議論

とも対応する。つまり写真は見る者に強烈な印象を与えるが、一方で「本当はそうではない」「実際はもっとひどかった」という反応を引き起こす。前掲の「改造」で確認してみると、大田洋子は「ちかごろ出たグラフの資料は直接眼に見えるものとして、その僅かな一部をつたえている。しかしこれらはおくまで僅かに一部であつて、アサヒグラフの写真を見た人々は、あの形相の屍が広島全市に充滿したのであることを知つてほしい」（「生き残りの心理」と述べ、映画「原爆の子」（昭和二十七年）に出演した乙羽信子は「アサヒグラフや岩波の写真文庫、赤松俊子氏の『原爆の図』、そしてまた数々の原爆写真集などによつて、最近続々と原爆の非人道性は伝えられているのですが、投下直後の地獄図絵は到底伝えることは出来ないと思ひます」（「心の傷は癒えず」と述べている。そして大田も乙羽も、被爆者が語る言葉の重要性を写真を通してとらえ返すのだが、これも原爆写真の効果と言えるかもしれない。しかし、そのように語ることが期待される被爆者の中にも、「私は原爆というのを聞くのも嫌で、『アサヒグラフ』なんかみても、あんなことは極く一部で、もつともつと現実はいどいわけですからね。むしろそういうものは、全然忘れ去りたい。古傷に触るようなものでしてね」（『座談会』死に勝る恐怖）という考えがあり、問題は複雑である。

「アサヒグラフ」（＝「写真」）を「ルポルタージュ」という言葉に置き換えても同じような問題に立ち会はずである。野口は「原爆名所めぐり」をしながら、それに「抵抗」と「嫌気」を感じている（二・六）。「原爆名所めぐり」は「原爆八年後の広

島」のルポルタージュを書くことを目的とするから、つまり書くことに対する「抵抗」と「嫌気」である。「原爆」の跡を「名所」として「見学」ということはどういうことなのか。それでは他の見物人、特に「胸にカメラをぶら下げて」街を歩いたり、車を「名所」の前にさつと乗りつけて、一、二分見て、又さつと走り去つて行つたりするような「若いアメリカの兵隊」と変りがないのではないか（二・六）。彼らとは違って、作家として取材に来ているにもかかわらず、眼前の「原爆」の痕跡を前にすると「一向に気の利いた小説的想像」は湧いてこない。ルポルタージュは、「伝えることは出来ない」「全然忘れ去りたい」という言葉にどのように応答しえるのか。

4

そこで阿川が採用した方法について考えていきたい。既に述べたように、「魔の遺産」には蜂谷道彦『ヒロシマ日記』と林芳郎『一郎―幼き生命の訴え』が引用されている。前者は、初め「通信医学」（昭25・8〜昭27・11）に「広島原爆雑話」と題されて連載された。「通信医学」は通信医学協会の機関誌で、当時広島通信病院長だったのが蜂谷である。その後、加筆・訂正したものが『ヒロシマ日記』（朝日新聞社、昭30・9）として刊行された。

『魔の遺産』が「新潮」に連載されていたのは昭和二十八年七月から十二月までなので、作者は初出を読み、引用したことになる。「昭和二十年八、九月当時の蜂谷が、暇を見つけては書き

とめておいた日々のメモをもとに、のちに毎日の日記の形にまとめたものである」（榎原修『ヒロシマ日記』（蜂谷道彦）「解釈と鑑賞」昭60・8）から、メモ↓雑誌↓単行本というテクストの改変にはその時々現在の立場から、当時の光景や心情を克明に再現しようとする力が働いている。著者の体験談だけでなく、知人たちが見聞きした体験についても、彼らの語り口を生かしながら描かれる。E・カネッティが「散乱していたネガを偶然手に入れ繋ぎあわせて一本のフィルムをつくる仕事」のように「誰もが自分の体験を他の人の報告によって補足しようと努める」（『断ち切られた未来―評論と対話』岩田行一訳、法政大学出版社、昭49・9 八十七頁）と指摘したのも首肯できることである。

一方の『一郎』（東和社、昭26・1）は、被爆し、昭和二十四年の秋に亡くなった息子をめぐる回想記である。容態についての「実証資料」（七十三頁）として織り込まれているのが、自身の日記、妻の日記、息子の日記、綴方、医者 の所見等である。ここでも引用はテクストに厚みを持たせる方法として用いられている。

阿川は連載最終回の後記で、「二つの著作からは、それぞれ、著者の諒解を得て、多数、場面を借用」したことを明らかにしている。具体的にはどの場面を引用したのか。まずは小説全体に見られる『一郎』からの引用を検討し、傾向をとらえてみたい。参考までに引用箇所を挙げておく（『一郎』↓『魔の遺産』）。

① 一郎の病状に対する医者の所見（九月）↓健の病状に対する医者の所見（一・二七）。② 一郎の歯（十月）↓健の歯（二・七）。③ 一郎の抜け毛（十月）↓健の抜け毛（二・七）。④ 一

郎が描いた三日月の絵（十一月）↓健が描いた三日月の絵（二・七）。⑤ 一郎の憂慮すべき状態（十一月）↓健の憂慮すべき状態（四・七）。⑥ 一郎が幻聴を聴く・高温になる（十一月）↓健が幻聴を聴く・高温になる（四・七）。⑦ 一郎の激しい動悸（十一月）↓健の激しい動悸（四・七）。⑧ 一郎の黒い大便（十一月）↓健の黒い大便（四・八）。⑨ 一郎の最期（停電）と咳く・突然叫ぶ・水を飲む・胸と呼吸の音・あぶくが出る・心臓停止（十一月）↓健の最期（四・八）。⑩ 一郎の死体解剖（あとかぎ）↓健の死体解剖（四・九）

子供が「単純な肛門周囲炎」と医師に診断され（①）、「健の死を暗示するやうな最初の徴候」として歯茎が腫れぐらついたり（②）、抜け毛が多くなったりし（③）、とうとう「極めて憂慮すべき状態」となって（⑤）、苦痛の中で最期を迎える（⑥く⑩）という流れが、ほぼそのままの形で採用されている。健が描いた三日月の絵を見て子供の感覚が異常だと感じる場面（④）については、常子が野口にクレヨンと画用紙を買ってくるように頼み、野口がそれを買う場面（二・六）を加筆している。『一郎』で中心になるのは約三ヶ月の間起こった出来事だが、『魔の遺産』ではそれを約一ヶ月という時間で描くために、場面の順序を入れ替えたり、組み合わせたりする操作が行われている。

『ヒロシマ日記』の場合はどうだろうか。これは「柳の会」のメンバーの発言として引用される。「柳の会」は、被爆当時広島通信病院に逃れて生き残った人々が作ったグループであり、座談会はその幹事会（懇親会）の場を借りて行われたことになってい

る。会全体のうち、引用による部分は少ない。対応関係は次の通りである(『ヒロシマ日記』初出↓『魔の遺産』)。

①著者と小山君による患者に関する会話(八月七日) ↓ 根岸さんによる通信病院に集まった時の話(二・一三三)。②勝谷さんによる三篠橋の話(八月七日) ↓ 土三さんが妻から聞いた三篠橋の話(三・三三)。③i著者が見た被爆した馬の話(八月八日)、ii著者が見た原爆症の犬の話(九月三日) ↓ 被爆した馬と犬の話(三・一八)。④溝口君による泉邸の近くの淵の話(八月十四日) ↓ 中黒瀬君による泉邸の話(三・一九)。⑤保田君による御真影の話(九月十三日) ↓ 中黒瀬君による御真影の話(三・一十)。⑥小畑の小父さんによる四人の中学生の話(八月十三日) ↓ 小西さんによる四人の中学生の話(三・一二)。⑦橋本君によるきこ雲の話(九月四日) ↓ 広畑さんによるキノコ雲の話(三・一三三)。⑧著者による「町の鉱山」の話(九月十四日) ↓ 広畑さんによる『町の鉱山』の話(三・一三三)。⑨西井エミ子のカルテ(八月二十九日) ↓ 広畑さんの娘のカルテ(三・一四四)。⑩著者による蠅の黒山の話(八月二十五日) ↓ 広畑さんによる日院長と蠅の話(三・一四四)。

武田勝彦は座談会について「なんとといってもフリー・トークインのなかでの体験談であるので本書の圧巻でもある」(「解説」『魔の遺産』PHP文庫、平14・5 二八四頁)と評価し、「最も美しい」話として「金屏風」を挙げたような「綺麗な雲」のエピソードを挙げているが、これも『ヒロシマ日記』からの引用である(⑦)。当然、作者が加筆した部分もある。被爆した馬のその後について

て「夜中にも死んで、誰か処分したのかも知れませんが」、「食ったんじゃないか?」という会話(③)、泉邸前の川について「私らが子供の頃、河童が出ると言われた淵じゃ」という発言(④)は、『ヒロシマ日記』には無い。「町の鉱山」の話は、廃墟から金品を掘り出し財を築いた男の話や戦後の罹災保険の話へと広がりを持たせている(⑧)。実際はこうした事例は少なく、多くは原テクストのまま引用している。引用からどのような問題を考えることができるのか。例として⑥の対応箇所を検討する。

小父さんの話には数々の悲劇があった、その中で小父さんが特に語調をおとして語った一つを書きとめることとする、

天神町で大焼傷をした四人の中学生に逢いました、路際に車座になつておるので、その中の一人に、お前の家は何処かと問うたら、天神町と云うんです。ここが天神町じやと云うと、母ちゃん姉さんがくるのですがこなくともエイトイウテクレサイ、僕等はここで四人死のうでノウ、と云うたら、残りの子供が、よし、連なつて死のうのう、と云うんです。

小父さんは臉上涙をたたえて、

私は今までそんなに涙がでたことはないんですが、この時ばかりは可哀想で可哀想で声をあげて泣きましたよ。暑いから日蔭を作つてちょうだい、と云うから、兵隊のトタンや筵をかつて日蔭を作つてやりました。も一人の子にお前は何処かと訊ねたら矢野(?)と云うんです。何かいる物はないかと云つたら、僕等は死ぬのだから何もいりませ

ん、と云うんです。それじゃ、小父さんはトマトを弁当に持つとるから、トマトをたべさそうと云つて、二つのトマトを四つに切つて、一人一人の口にトマトの汁をしぼりこんでやり、どうじゃ、おいしいか、と云つたら、美味しいなあ、と云つて口をもぐもぐさしましたよ、一人の子供が、水が今少し飲みたい、と云うんですが、水をくむ物がないので、私の帽子へ水をくんできて皆に十分水を吞ませてやり、ますこし、辛抱しとれよ、二中の救護班があの下におつたからのう、今から小父さんが行つて教えてやるからのう、ここで待つとれよ、と云つて、持つていた仁丹をのませて下へくだつたのですが救護班もおらず、弟もみつからず、自家へかえつたのですが、気がかりでたまらんので、翌朝、早よう起きて、何やかや子供の喜びそうなものを持つて行つてやつたんですが四人とも、元のまんまで死んでいましたよ。私は二度泣きましたよ、掌を合せて拝んだ。それから、又、弟をたずねて一日中市内をうろつきましたが、あんな可哀想なのはなかつたです、今でも涙がでます、

と小父さんは臉をぬぐつて私の方をみつめた、私も小父さんが力なく話す一語々にこみあげるものを覚えた。

↓「奥さん、それぢや、今度はあの話をして下さい。天神町の中学生の話を」根岸さんは、専ら話の曳き出し役を勤めた。

「あれですか？」小西さんは、気の進まないやうな顔をしたが、話し始めた。「わたしが逃げて歩いてゐる時天神町の

道ばたで、大やけどをして、車座になつて坐つてゐる、四人の中学生を見かけたんです。『あんた達、家は何処ね？』と訊ねますと、中の一人が、『てんじん』と言ひます。『此所が天神町ぢやないの』と言ふと、頷いて黙つてゐるんです。するともう一人が、『小母さん、うちの母ちゃん姉さんが来る苦なんぢやが、もう来んでもいいと言つてちやうだいい。——僕は此所で、四ツたりして死なうや』さう言ふと、他の三人が口を揃へて、『うん死なう』『連れだつて死なう』といふんですよ。『暑いから、日蔭を作つてちやうだい』と言ひますから、其の辺にあつたトタン板や何かで、蔭を作つてやり、『何か欲しい物は無い？』と訊きますと、『僕は死ぬんだから、何も要りません』と言ひます。わたしは、手にトマトを二つ持つてをりましたから、それを四つに切つて、一人々々の口に汁をしぼり込んでやつて、『どう、美味しい？』と訊くと、『美味しいです。ありがたう』と言つて、口をもぐもぐさせました。一人の子が、『水がもう少し欲しい』と言ひますから、提げてをつた袋に水を汲んで来て、四人に充分飲ませてやつて、仁丹も口に含ませて、『救護班に逢うたら、小母さんが、すぐ来て貰ふやうに言うてあげるからね。もう暫く元氣を出してをんなさいよ』と、半分気休めを言つて、逃げて行きましたが、翌朝になつて、どうにも気がかりで、わたしより怪我の軽かつた主人に、見に行つて貰ひましたら、わたしが見たと同じ車座になつて、四人死んでをつたさうです」

「小父さんは臉に涙をたたえて」は地の文の説明なので、関係

する部分を含めて削除することで発言が連続し、長い語りとなる。小西さんはメンバーの中でも寡黙な方なので、この場面はより際立って見えよう。発言のうち理解できなかったためか著者が疑問符を付した一文も小説では削られている。水を汲んだ道具が「帽子」だったのが、提げていた「袋」に変更され、「救護班」がいるのを知ってその場を立ち去ったことが、「救護班」がいたら助けをよこすという「半分気休め」を言ったことに変化している。

翌日見に行った人間も、その後の行動も、違いが認められる。前者は誰が何を語り、それがどのように語られたかを細かく再現しようとするが、後者は前者を座談会の中の発言として組み込むので、部分的な改変を行い、話に多少の整理と変化を与えていることがわかる。以上のような傾向は他の引用箇所でも共通している。

いま注目すべきは、小説ではルビがまったく削除されていることである。語りに付されたルビは『ヒロシマ日記』では多く見られ、大きな特徴になっている。著者が聞いた体験談は、日記という書かれた言葉として表現されるが、ルビは、それが元々誰かによつて話された言葉であることを示す痕跡として存在している。

著者は、小畑の小父さんが少年たちと交わした会話を再現しようとする語りの生々しさを日記で再現しようと、ルビを用いたのである。だが、こうした語り直しの方法は『魔の遺産』では失われてしまっている。すると他の多くの記録の証言の語りと見た目の上では変らなくなってしまう。引用の試みは一方で、元のテキストにあった独特の語り口を平易なものにし、普遍化した被爆者像を立ち上げてしまう可能性も孕んでいる。

5

では『魔の遺産』でとらえようとする声は何か。小説は野口を歩き廻らせることで、様々な人々の証言の場を作り出す。様々な証言が交錯する座談会では、それぞれ、見て歩いて体験したこと、その後経験した病気や現在の感想が語られている。一人物の証言であっても、三篠橋でたくさんの死体を見た妻の体験談（三土）、広島と長崎で二重に被爆した男の話（三土）、黒こげの死体を見て歩いた母の体験談（石垣）、など、他者が体験した事柄も話される。他者の原爆体験も、それを聞いたこと・知ったことによつて、自らのかけがえのない実体験として記憶されているのである。

また『広島市各中学校生徒の原子爆弾被害聴取状況』の「抜き写し」（根岸）や、同級生の体験をノートした「前後脈絡もない、断片的記録」（中黒瀬）、死亡した自分の娘のカルテ（広畑）等の記録も、自らの語りの不足を補うものとして必要とされている。さらに、お互い意見し合うために、同じ出来事に対して違った印象が語られたり、天皇制や碑文、アメリカをめぐって異なる意見が出されたりしている。座談会においても「誰もが自分の体験を他の人の報告によつて補足しようと努める」（カネッティ）光景を目の当たりにすることができる。

こうした語りの場面に拮抗するように、発言者が、自身の語り方に言及したり、言い淀んだり、沈黙したりする場面が描かれている。それらに「原爆」を語ることに付きまとう困難さが現われているのではないか。「経験した事から逐一しゃべつてみて」も、

逃げていた途中や、病院に着いてからのことが「ちよつとどうもはつきり」(三十一) しない部分があるため、語りきれないものが残つてしまう。逆に「はつきり」していれば、「本当は、自分のひどい目にあつた経過を、逐一しゃべるのはいや」(中黒瀬) だったり、「尻ごみ」して「つらい」(小西) と答えたりもする。「当時の状況を、順序立ててよくわかるやうに話すのが苦が手」(中黒瀬)、「皆さんのやうに上手に話せんし、お話しする程の事も、大してありません」(小西) というように、自らの語りの能力を問題にする場合もある。原爆を語るこの場合は、初めから「一寸緊張したやうな、気重い沈黙が座を支配し」(三十二)、「緊張」と「沈黙」を繰り返しているのである。石垣さんが、「一つ不思議なのは、わたしは、火が消えて病院の中へ寝かされるまで、物音を一つも聞いてゐないのです。父や母の言つた言葉を憶えてゐるのは妙なんです、其の他は、台所で茶碗やお箸を力チャカチヤ洗つてゐた音だけが記憶にあつて、其のあと家が倒れて来るのも、トタン板や木片が空を飛んでゐるのも、消防がホースで水をかけてゐるのも、全部音無しの世界で、丁度暗い無声映画を見てゐたやうな感じなのです。ピカと光つた時も、爆発の音はわたしは聞いてゐません。病院の中で寝てから初めて、騒々しい物音がはつきり聞えて来ました」(三十五) と語るように、原爆のそのあまりに大きな破壊は、爆発の瞬間からそれを語ろうとする声や音を奪ひ続けている。

原爆を語る困難さは、医療関係者の話にも現れる。原爆という出来事は放射能障害の後遺症を人々に残し、さらに人々に語るこ

とを躊躇わせ、拒ませる。健が「骨髄性白血病」と診断された時、「医学的に何故さういふ事が起るか、未だ解決がついてゐない」ために、「医者とし」ては「原子爆弾の放射能を浴びられた為に、八年後にかういふ疾患が出たと、さう言ふことが出来ない」(一八)。「原爆の屍体」の「病理解剖をやつてゐる」(二六) 柳川教授も、「原爆の被害の限界がどこまでかといふ事」について第一線で研究する「立場」故に、「未だ未だ何も彼も疑問」のままの「原爆症」について「慎重にせざるを得」ず、「露骨な、迂闊な事は言へ」ないのである(二二)。「さらに柳川教授は『黒い雨』の重松のように、「古い友達」の「縁談」の問題を抱えている(二二)。「二十一になるその娘は原爆に遭つていないが、「相手の青年が、身体に、外から見えない部分にケロイドがある」ので、「其の事が、結婚の対象として不適當かどうか」問い合わせがあつたという。「見知らぬ青年」ではあるが、彼の立場を慮れば、自分の返事次第で破談する可能性があるために、「どうしても返事が書けない」。これも語ることの難しさを物語つてゐる。さうした声への注意は近親、特に常子に対しても向けられてゐる。野口の叔父で、常子の夫の辰造は、戦争中仕事でマレーにいたので被爆しておらず、健の病院に行くことも避けがちであるが、常子は被爆しており、母親と、健の兄と姉にあたる子供も、辰造の不在中に原爆で失つてゐる。常子は爆撃で怪我をし、その後も原爆症を患い、いまま健に付き添つて病院に泊り込むように、常に原爆の問題と向かい合わせになつてきた。野口は数年ぶりに会い、「派手な顔立ちにそくはない音痴で、音楽家が彼女の歌を譜に写し取るとしたら、さぞ難儀するだらうと思はれるやうな節

廻して、家事をしながら、常子は臆面もなくさも楽しげに、古い大正時代の唱歌を唄ふのだが、声音だけは若々しく美しいソプラノなので、賑やかに滑稽であると同時に、少々悲しく異様な気持も聞く者に起させた」と感じ、「調子はづれの歌」の原因を「被爆の時のショック、それに続く不幸、そして何か不分明な物質の影響」にあるかもしれないと考える(一・一)。健が「暫く入院を続けなければならぬ」くなり、常子は「其の後、唱歌を唄ふことをしなくなつた」(二・一)。こうした変化に不調和な声、失われた声の存在をとらえている。常子は健が死の直前になるまで子供が「骨髄性白血病」であることを知らされていなかったが、結局何も知らされなかったのが健であり、最も痛みの声を挙げていた当人でもあった。

ここで考えてみたいのは、野口が聞き書きという形で原爆の問題に迫ることで、うまく語ることができない人でも、うまく書くことができない人でも、対話の中で言葉を生み出し、奪われた声や音を取り戻す機会を得るのではないかということである。その可能性に注目した取り組みが、小説と同時期、山代巴らによる「原爆被害者の手記」編纂で行なわれている。手記を編纂した「原爆被害者の会」の発会までの経緯と活動内容については川手健の「半年の足跡」(原爆被害者の手記編纂委員会編「原爆に生きて―原爆被害者の手記」三一書房、昭28・6)に詳しいので省略に従うが、いま同書で確認したいのは、原爆写真集が出版され、好調に売れていく例を挙げながら、昭和二十七年頃「原爆に対する関心が急速に高まつて来」て、それが「被害者を自覚させ

てゆき、原爆に関する様々の批判も活発になつて来」て、「被害者の会の発足の機は熟した」と書かれていることである。会は、第一回幹事会(昭和二十七年八月二十四日)から第二回幹事会(同年十月二十日)までの活動のうち、先に見た武谷の取材に協力を行なっている。第二回幹事会から第一回総会(同年十一月十四日)までに行なわれたのが原爆の手記編纂である。山代巴の「序」(前掲「原爆に生きて」)によれば、手記編纂は昭和二十三年八月から企画され、具体的には昭和二十七年の八月に開始された。この間仕事が進まなかつたのは、「その集め方について、適切な方法がみいだせ」なかつたからだという。それが「八月二十一日の相談の結果、新聞やラジオによる募集には、あまり頼らず、我々が被害者の家を直接訪問してお願いし、書けない人々のは代筆してもいい、発表の機会に恵まれない人々の、手記を書かれることに重点をおこうということになり、その方法が「仕事を進める一つの鍵となつた」のである。これより、山代は「被害者を直接訪問して、そこにある苦しみを見、共に語つたせいからか、この仕事は最初から最後まで、未知の世界に驚異の目をみひらいた時の、感激というか、興奮というか、あのういいういしいものによつて推進されました」という感想を持つに至っている。しかし別のところでは、「一応は聞き取り書きに忠実に綴つてみて、それを必ず本人に読み聞かせ、本人の判断のままになおさせるようにした。そこで学んだことは、私達が直接耳に聞いたままの言葉だと、非常に強く訴えるものがあるのに、それを本人の意志に従つて、あの言葉を取りかえ、この言葉を取りかえするうちに、概念的で杓

子定木なものに変えられてしまふことだつた」(「広島島の文化文学活動」〔文学〕昭30・5)とも書いている。山代たちの方法は『魔の遺産』においても問題となる。ルポルターージュの取材は「書けない人々」の「代筆」のような役割を担う。その一方で、語った言葉を変形するうちにその言葉が持ついた迫力を失つてしまい、「概念的で構子定木なもの」にしてしまふ。現場をリアルに再現しようと言葉を駆使するルポルターージュは、そうした問題と絶えず格闘しなければならぬ。小説『魔の遺産』は野口という作家を通して格闘し、その困難さの在り様を描き出している。

6

野口は「原爆八年後の広島」といふ文学的な報告を書くために取材を行った。ABCの最初の取材では「自分の職業と、これから取り掛かる仕事の内容とを告げ、見学を申し込ん(一・三)だり、『グローヴのやうな手』を持つ小西さんに「自分の仕事の、職業意識からも、非常に興味を持った」(二・六)り、「気重い感じもし」つつ井上のもとへ「仕事の為の新しい知識が得られればといふ気持ちから、やはり訪ねて行く事にした」(二・七)りと、その取材姿勢は概ね意欲的であり積極的である。健の病気が骨髄性白血病だと知らされたとき「彼の心は衝撃を受けたが、同時に、この幼い従弟の致命的な血液の疾患が、自分求めて広島へ来た仕事の、よき参考になるのではないかと、いふ事も、明らかに考へ」(二・一)、「健がどんな風に悪化して、

死んで行くか、自分はしつかり見てゐてやらう。それ以外に、結局自分には何も出来さうもないのだ」(二・一)と考え、小説を書くことを第一義としている。だが、「自分が広島へ来て、常子や健の場合に出会つてみて、彼は自分もやはり、一箇の好奇心を持った傍観者に過ぎない事を、想はないわけには行かなかつた」(二・一)と、自らを振り返るようになっていく。特に作家という立場を問い返すの聲は、野口に繰り返し投げかけられる。ABCで応対したミス・キムラが「御発表の前に、一度原稿をこちらにお見せ願ひたいと存じますが」(一・五)と言ひ、柳川教授が「大体君たちは、何かセンセイショナルな話があれば、鬼の首を取つたやうに喜ぶらしいが、何でも彼でも原子爆弾と結びつけて、書き立てる事は甚だ危険だ」(二・二)と注意するのは、「不正確な記事」から「誤解」が生じることがあるからであり、ここでは作家が書くことのマイナス面が強調されている。逆に、「柳の会」の広畑さんが言うように「貴方のやうな御仕事を通して、簡易保険の業務に関する認識を一般に弘めて頂くと、最も結構なのであります」(三・一)と期待される影響力もある。もっとも、商事会社を経営する辰造のように「お前達の世界は又別かな」(一・七)、あるいは「お前はまあ、お前の仕事をしたらいいぢやないか」(二・八)と作家をどこか世間離れしたものと位置付ける形もある。こうした作家という立場への言及は、そう語りかける側の立場もまた問い返すことになる。野口は、原爆をめぐる語り手たちの様々な立場に照明を当てていくやうな存在として描かれているといつてよい。

数人を取材し、広島滞在一ヶ月を迎えようとする頃、野口の取材態度はいよいよ消極的なものへと変化する。

広島へ来てそろそろ一と月で、従弟の病気を今暫く見て行くべきかと思ふが、あからさまに仕事の材料として其の死を待つてゐるのは、さすがにいやな気がし、彼は帰心がつて来た。(略)広島市内の観るべきものはあらかた観て、十人あまりの人からも話も聞き、仕事の準備も一応出来上つたと思ふと、とにかく一度広島にお別れしたい気持ちに、彼はなつて来たのである。「原爆八年後の広島」といふ報告を作るのを仕事として、いくらか意気込んでやつて来た彼としては、どこまで調べて充分といふ事は無く、我ながら少し弱気なやうな、或は何かに対し、相済まぬやうな感じもするが、これ以上「広島」といふものに積極的にぶつかつて行かうと思つても、正直なところ気持がもう引き立つて来なかつた。(略)彼の其の文学的な報告は、八月号の雑誌に出る筈で、約束の期日まで未だ日があり、もう一度来る事にもいいのだと、彼は考へた。(四・一)

いま・この野口の心情が語られているこの場面は重要である。当初の仕事に対する意気込みや、叔父家族に対する気持が、取材をする中で逆転する。野口が何とか広島に滞在し続けられるのは、小説の「材料」となりそうな、死期が近い健の存在によつてだが、それを書くことに後ろめたさを感じている。「原爆」へ近づけば近づくほど、それを書くことが躊躇われる。というより「原爆」が小説に書かれることを固く拒むのである。

野口は相変わらず、少々憂鬱症の気味であつた。原因の何割かは、文筆を業とする自分が原子爆弾の「調査」をしてゐるといふところにあるらしかつたが、楠原の話聞いて来てからは、救ひの無い暗い映画を観たあとのやうないやな気分が、一層重く心につきまとい、離れなくなつた。(略)／彼は、今度の仕事で、広島へ来る前も、来てからも、必ずしも原子爆弾の否定的な面ばかりを報告に書く必要はない、原子爆弾に何か少しでもいい面が、それが落された為の建設的な意義といふやうなものももしあるならば、それも拾ひ上げるべきだ、そんな事を思つてゐたのであるが、今の彼の気持では、これは完全な悪であるとしか考へられなくなつた。原子爆弾といふものは、結局、悪魔が科学的な構造物の姿をとつて、此の世に現れたとても思ふより仕方がない。(四・六)

物語の結末で野口は汽車に乗つて広島を後にする。汽車に乗つた野口は、「うしろめたさに似た感じ」を抱きつつも「とにかく落とす」く(四・十)。意気込みが挫かれ、ホーム・シツクになり、神経を疲労させ、原爆に対する様々な考えが悉く打ち砕かれ、原爆が「完全な悪であるとしか考へられなくなつて」取材を終える。野口が語る心的体験には「原爆」がそれを語る主体を徹底的に拒絶する様を見ることが出来る。野口は書かねばならない「原爆」から書くことを徹底的に拒絶され、意気消沈させられ、断念させられる。

ならば別の方法で「原爆」を書くことはできないのか。例え

ば山田かんは長崎の原爆記録について、「紋切り型の考えからは、長崎に原爆の文学といえるものを創り出すために（尤も文学を創り出すためだけに記録が必要なのではなく、個々に書かれていく記録はそれとしての機能をもつものでもあるが）広範に記録を書いていくということを文学運動として理解せず、何故か狭いトリビアルなものとしてとっているのである。正確ということは原子爆弾から始まる諸々の影響のデテイルまでを追求し核心に迫る態度なのだ」（「長崎の原爆記録をめぐって―その方法を中心に―」「地人」昭31・11）と述べた。『魔の遺産』は街と文献を往き来しながら、様々な方法を試みている。そのような方法に基づく小説化の実践もまた「文学運動」である。（新しい記録文学）の模索は続く。

注

- 1 「ほたる―「H市歴訪」のうち―」（小説公園「昭28・6」）、「マツカーサー道路との対比―「H市歴訪」のうち―」（「解放」昭28・7）、「残魄点々―H市歴訪―のうち」（「群像」昭29・3）。「夕風の街と人」との初出は「群像」（昭29・11）、「新日本文学」（昭30・8）。
- 2 初出は「新潮」（昭28・7）、「初刊は『魔の遺産』（新潮社、昭29・3）。再刊『阿川弘之自選作品』Ⅱ（新潮社、昭52・10）、「魔の遺産」（PHP文庫、平14・5）、「阿川弘之全集」2（新潮社、平17・9）。「魔の遺産」からの引用は『阿川弘之全集』2に拠る。
- 3 阿川が言及した大田の発言は、大田洋子・中本たか子・畔柳二美・大原富枝・信夫澄子・佐多稲子「《座談会》現代の課題」（新日本

文学」昭28・8）の中に見られる。大田は『魔の遺産』連載第一回を読み、「整然とリアルな筆致で書いてい」ることを評価しつつ、百メーター道路については、「軍用道路だという伏線」がなく、「現在の広島は軍都として復興しているようなものなので、そこを阿川さんは作品の中で突いていないように思います」と意見する。大田自身、同年七月に発表した「マツカーサー道路との対比」（注1参照）で、百メーター道路が軍事転用される可能性を指摘しており、「夕風の街と人」においても同様の危機感を描いている。

- 4 千谷道雄は『春の城』のころ（阿川弘之）（「解釈と鑑賞」平1・6）で、「一方、被爆者の側にとつても、その影響がどんな現われ方をするかわからないために、自らの被爆体験をかくそうという気運もあり、『魔の遺産』の取材では必ずしも誰もが協力的とはいえなかったとも聞いている」と紹介している。
- 5 井伏が『黒い雨』の執筆に際し、『魔の遺産』を読んでいた可能性は高い。「黒い雨執筆前後―被爆25周年にあたって―」（「赤旗」昭45・8・2）によれば、井伏は取材の中で「阿川弘之君の作品（『魔の遺産』）に出てくる通信病院の院長にもあった」という。

6 島尾敏雄は、「聞き書」によって「色々な立場の人の態度や意見が、それらの人々のイメージを確実に読者に刻みつけながら、明確に、表現されている」と評価している（阿川弘之著『魔の遺産』「近代文学」昭29・7）。

付記 本稿は、第十八回原爆文学研究会（平成十八年三月二十五日於・九州大学六本松キャンパス）での研究発表をふまえ、新たに論としてまとめたものである。